それぞれの時代の情緒と風情がそのままに息づく、龍野の各地区

① 門の外（もんのそと）

・寛文12年の文書に「御門外（おもんのそと）」と記された上川原の枝町（えだまち）で、善龍寺（ぜんりゅうじ）の東にはかつて惣門（そうもん）があり、その外という意味が地名の由来です。当時は紺屋（染物屋）が軒を連ね、地区の東には公用の馬繋ぎ場もありました。現在は、本市の地場産業である淡口（うすくち）醤油を製造する事業所があり、醤油の香りが漂う醸造のまち「龍野」にふさわしい景観のある地区です。

② 上川原（かみがわら）

・揖保川河川敷に形成された町の北部に位置することが、地名の由来で、17世紀前半の古文書には、上川原の地名が確認できます。江戸時代は、地区内を緩やかに曲がる通りに沿って、多種多様な店が軒を連ねる商家町でした。現在も町家造りの面影を残す建物が多く、本瓦葺（ほんがわらぶ）きの屋根と塗籠（ぬりごめ）の2階部分が特徴的な町並みです。近年は、古民家を再利用した喫茶店や美容室、書店なども営まれています。

③ 下川原（しもがわら）

・揖保川河川敷に形成された町の南部に位置することが、地名の由来です。江戸初期は、酒造業、中期以降は、醤油醸造業が盛んな商家町でした。明治時代になると、乾物屋や豆腐屋などの日用雑貨の商店街に変化しました。2階の外観に伝統的な町家の意匠が比較的よく残っており、小規模な町家が軒を連ねる様は、城下町龍野の落ち着いた風情を今に伝えています。

④ 川原町（かわらちょう）

・揖保川河川敷沿いに形成された町、つまり川原であったことが、地名の由来です。江戸時代には、町人地に武家屋敷も点在し、川沿いには商家が軒を連ねていました。また、龍野藩に仕える儒学者の本間（ほんまけ）家、俣野（またのけ）家、藤江（ふじえけ）家が並んでおり、俣野氏の私塾「幽蘭堂（ゆうらんどう）」は、藩の内外の子弟が学ぶ庶民教育の場であったことが分かっています。屋敷型住宅や町家、洋館が散在する中に、高塀（たかべい）が連なる独特の景観を持つことが特徴です。

⑤ 上霞城（かみかじょう）

・「霞城（かじょう）」は、龍野城が霞城（かすみじょう）と呼ばれたことに由来し、現在は上、中、下の三地区に分かれています。上霞城一帯は、龍野藩に仕える武士やその家族が住む武家地であり、藩政の中心地でした。また、大正時代に建てられた旧龍野醤油同業組合の事務所と醸造工場は、「醤油の郷大正ロマン館」として改修され、龍野地区の観光案内や地場産品の販売等を行っています。

⑥ 大　手（おおて）

・龍野城の大手門周辺に形成された地区であることが、地名の由来です。江戸時代から醤油醸造業が盛んで、タイルと石貼りの洋風建築の「うすくち龍野醤油資料館」は、ランドマークとなっています。また、大手には4つの寺院があり、通りから見る山門の風景と、その奥に見える本堂の大屋根の存在は、周辺の町家や土蔵造りの景観と相まって、落ち着いた歴史的な風景を作り出しています。

⑦ 立　町（たてまち）

・龍野城の大手門から南へ縦（立て）に延びる道筋にあったことが、地名の由来です。江戸時代には、小売業や両替業等を営む商家で賑わっていたほか、現在の中央公民館の位置には、町会所（まちかいしょ）（集会所）が設置され、明治以降は、同じ場所に龍野町役場が設置されるなど、行政の中心地でもありました。伝統的な町家による家並みの中に、明治期に建てられた洋館が混在しているのが特徴です。

⑧ 本　町（ほんまち）

・龍野城の大手門から南下した位置にあり、城下町の元（本）となる町であったことが、地名の由来です。江戸時代には、今宿筋（現在の龍野図書館前の通り）から十文字川（どじがわ）までの下町筋に醤油業者が集まる醸造町でした。土知川（どじがわ）（十文字川）口に御番所が置かれ、日山村との境にあたる川原町筋交差点には門が設けられていました。十文字川沿いに連続する白壁の建物が美しく、豪壮な商家が並んでいることが特徴です。